

# 幼稚園における観察・参加実習の学びと気づきについて

蜂谷 幸子・大野 雄子・吉村 真理子・蓑田 喜子・田中 幸

## The learning and finding of teaching practices for observation at kindergartens

Sachiko HACHIYA Yuko OHNO Mariko YOSHIMURA Yoshiko MINODA Miyuki TANAKA

キーワード：教育実習 実習教育 観察参加実習

### 1. 問題と目的

本学の教育実習は、1年次後期の「教育実習Ⅰ」（事前・事後指導）、2年次前期の「教育実習Ⅱ」（事前・事後指導）と4週間の「教育実習Ⅲ」から構成されている。「教育実習Ⅲ」は1年次の1週間の観察・参加実習と2年次の3週間の本実習の、計4週間で2期に分けて実施している。1年次の観察・参加実習は、本学の附属幼稚園において6月から12月にかけて7期に分け約25名ずつで実施している。2年次の本実習は卒業園他において5月から6月にかけて行われる。

1年次に観察・参加実習を行うことにより、入学後早い段階から実際の子どもの姿や子どものかかわりの経験を踏まえて日頃の講義を受講することができること、1年次後期の「教育実習Ⅰ」の中で十分に振り返る時間を確保することができ、気づきの共有や学びの定着が図られること、自らの課題を意識して1年次2月の保育実習や2年次5、6月の教育実習（本実習）に備えることができることなど様々なメリットがあり、有効な実習形態であると

感じている。

本学の観察・参加実習はこれまで、近隣の幼稚園と連携し、1年次11月に一斉に実施していた。1年次学生が7～10園（年度によって異なる）に分かれ、実習をさせていただくのである。この形式の場合、学生は1年次後期の「教育実習Ⅰ」の中で実習の概要、心構え、実習日誌の書き方など基本的な知識・技術を習得したうえで実習に臨むことができた。しかし一方で、実習する園により保育形態、保育内容、保育方法は異なるため、それぞれの園の特色に触れる機会ではあったものの、学生間の学びが共通なものになるには限界があった。

そこで今年度より、本学の附属幼稚園との連携をより強固なものにし、本学での学生の学びを附属幼稚園の先生方に理解してもらった上で受け入れ・指導をしていただくこと、附属幼稚園での学生の学びや経験や実態を直接見たり伝えてもらったりした上で短大での学生の指導に役立てることなどを意識し、観察・参加実習園を本学の附属幼稚園1園のみ

とした。170名を超える学生が一斉に実習をするのは困難なため7回に分けて実施することになったが、学生によっては入学後2か月での実習となり、これまでのように事前指導ができなくなってしまった。そこで5日間の実習を1日目：環境 2日目：子ども 3日目：保育者 4日目：出来事（エピソード） 5日目：1日目から4日目のすべて というように着眼点を示した記録用紙（図1～図6）を配布し、学生の学びを支える工夫をした。

本論文では、新しい実習形態となった今年度の観察・参加実習の実態を、学生の自由記述による観察・参加実習振り返りシート（図7、以下振り返りシートとする）から分析し、今回の実習教育の成果と今後の実習教育の改善点などを検討する。

2. 方法

平成28年度172名の保育コース1年次在籍者のうち、5月～9月に観察・参加実習を行った学生148名を調査の対象とした。後期開講科目「教育実習Ⅰ」の授業内で「観察・参加実習の振り返り」の時間を設け、振り返りシートへの記述及びグループ内での情報交換、クラス全体での情報の共有を行った。授業時間終了時に振り返りシートを回収した（なお、観察参加実習未実施グループに関しては他グループの振り返りをもとに、実習課題をたてるようにした）。

本論文では回収したシートのうち、有効な記述のある129名分のシートを分析した。配属クラス別では、3歳児24名、4歳児57名、5歳児48名であった。

1日目 テーマ：保育室内・外の環境をじっくり観察しよう

学籍番号	氏名
------	----

年	月	日	曜日	天候
---	---	---	----	----

回属クラス	役	組	出席	名	欠席	名
-------	---	---	----	---	----	---

保育実習記録（さまざまなものの配置などを図にし、どんな風に使われているのかをフロッピーで書き残そう）

図1 観察参加実習記録用紙1日目（田中作成,2016）

1日目 テーマ：保育室内・外の環境をじっくり観察しよう

学籍番号	氏名
------	----

今日の気づき・反省・疑問など

明日の実習の目標

図2 観察参加実習記録用紙1日目裏（田中作成,2016）



教育実習1 ② 観察参加実習での学びをもとに振り返る		
	園長先生	文筆仕
実習で気づいたこと、学んだこと		
実習で悩んだこと、うまくできなかったこと		
実習でうまくいったこと		
今後の課題		

図7 観察参加実習振り返りシート (田中作成,2016)

### 3. 「気づいたこと、学んだこと」について

振り返りシートの「実習で気づいたこと、学んだこと」に学生が記述した内容には、大きく分けて3つの視点があった。

一つ目は「保育者に関すること」であり、実際に幼稚園で勤務する教員の姿から見て気づいたことや学んだこと、あるいは保育後の反省会で直接ご指導、ご助言いただいたことなどである。

二つ目は「子どもに関すること」であり、子どもの発達や個人差に関する記述が主であった。

三つ目は「自分のこと」であり、保育者を目指すものとしての自分の現状についての気づきで、保育の現場で実感として感じた勉強不足、力不足などに関する記述である。それぞれの視点に沿って、見ていくことにする。

#### ①保育者に関すること

保育者に関する気づきや学びの詳細な内容は表1の通りであった。

幼稚園という集団での保育の場で、学生が保育者の行動を目の当たりにして圧倒され、かつ困難さを感じるのが「個も集団もどちらも見る」ことのようなのである。

表1 観察参加実習の気づき・学び (保育者に関すること)

	実習配属クラス		
	3歳児	4歳児	5歳児
<b>集団に関すること</b>			
個も集団も見る、全体を見る	2	3	1
個に応じた指導		14	4
集団の中で個を配慮しすぎない		8	
ほめて周囲に伝える	2	4	
<b>保育技術</b>			
注目のひきかたに工夫がある	8	7	4
絵本の読み方	3	5	2
導入の大切さ	3	4	2
けんかの対応	3	3	5
トイレの対応	1		
食事の指導	5	9	1
<b>援助の方法</b>			
意欲を引き出す	2	7	2
できるところは見守る		11	13
子どもと対話して考えさせる		7	6
発達や状況に応じた遊びの提案		4	2
子どものモデルとなる	3	1	1
<b>子ども理解・子どもとの関係</b>			
一人一人の子どもを理解する		5	3
子どもとの信頼関係が大事	5		1
子どもの気持ちに共感する	6		1
全力で子どもと向き合う、遊ぶ			10
<b>環境構成・事前準備等</b>			
環境構成のくふう	3	6	4
事前準備の大切さ		7	
安全	6	2	
予測や見通しを持つことの大切さ		4	
<b>保育者の職務等</b>			
仕事の責任の大きさ	1	3	
保護者とのかわり		1	
保育者の仕事内容	2	2	4
その他	1	1	2
	55	118	66

配属クラスの年齢により数値にばらつきが見られた。3歳児では24名の実習生が55の気づき・学びをあげたが、「個も集団も見る」ことに関連した気づき・学びは4であった(3歳児クラスに配属された実習生の「保育者に関する気づき・学び」のうちの7.3%)。ところが4歳児では118のうちの29(約24.6%)となり、5歳児には再び66のうちの5(7.6%)

## 幼稚園における観察・参加実習の学びと気づきについて

となっている。3歳児クラスでは子どもの発達に合わせ、子ども一人一人に合わせた援助が重要視されているのに対し、4歳児クラスでは3歳児の1年間の経験を踏まえてより「クラス集団」を意識した指導が展開されるようになり、5歳児ともなると子どものこれまでの経験や発達の状況に伴い、自然にそれらが展開されていくためではないだろうか。

3歳児は他の年齢に比べ保育技術に関する気づき・学びが多かった（3歳児41.8%、4歳児23.7%、5歳児21.2%）。集団生活にまだ慣れていない子どもたちの興味や関心をいかに引き寄せ、活動を展開していくのが保育において重要なウェイトを占めていると学生が感じた結果であろう。

また、4,5歳児は援助の方法に関する気づき・学びが多かった（3歳児9.1%、4歳児25.4%、5歳児36.4%）。記述内容を詳しく見ていくと、4歳児では「すべてを手伝うのではなく、できるところは見守っていく」「(着替えなど個人差があるが)できるように援助していく」という主に基本的な生活習慣面が記述の中心であったが、5歳児では「一方的な指示ではなく、子どもたちに判断させる」「子どもたちで解決できるように見守る」というように、子どもの活動や仲間関係のありかたなどに関する記述となっており、より子どもの主体性を意識した援助方法になっているという読み取りができるだろう。

このように考えると、たとえ同じ幼稚園に実習に行っているとしても、配属されたクラスの子どもの年齢により、学生の気づきや学びには違いがあるといえる。

### ②子どもに関すること

子どもに関する気づきや学びの詳細な内容は表2の通りであった。

表2 観察参加実習の気づき・学び（子どもに関すること）

	実習配属クラス		
	3歳児	4歳児	5歳児
<b>発達に関すること</b>			
思っていたよりできることが多い	10	12	25
思っていたよりできることが少ない	2	1	1
個人差が大きい	10	6	8
3～5歳の発達の差	1	6	5
<b>子ども自身に関すること</b>			
その子なりの思いがある	5	8	7
友達とのかかわりをもつ		6	7
<b>子どもの性格・情緒に関すること</b>			
好奇心旺盛	1		
先生大好き	2		
元気		2	
発想力ゆたか		2	
家庭の状況などが影響する		2	2
	31	47	56

どの年齢に配属された学生にも、「子どもたちは自分が思っていた以上にできることが多い」という気づきが多く見られた。1年次の学生は、それまでの生活の中で乳幼児とかわる機会が乏しく、観察・参加実習で子どもの実態をはじめ理解するものが多かったのだろう。思った以上にできることが多い、という気づきはつまり、「もっとできないことが多いと思っていた」ということであり、乳幼児と触れる機会が少ない学生は一般的に実際の子どもの能力より低く見積もってしまう傾向にあると言えるのかもしれない。一方で、「思っていたよりできることが少ない」と感じた学生も少数ではあるがおり、こういった個人間のギャップを埋めるには同一施設への実習は効果を発揮するといえるだろう。

子ども自身に関する気づきでは、「子どもには子どもなりの思いがある」という気づきが多く見られた。机上の学習では知ることができない、子ども一人一人の思いというものに学習の初期段階に触れられることは、意味の

あることであると考え。また、3歳児には見られなかったが4、5歳児に配属された学生には「子どもは友だちとかかわりたい気持ちをもっている」などの記述が見られた。3歳児1学期は教師との関係を多く持ちたがり、教師を介して友達とのやり取りをする時期であると考えられる。また9月も長期休暇明けで不安定になる子どもは教師を頼りにするであろうし、運動会練習などもあり、友達とのやり取りが多く見られにくい時期であったと考えられる。それに対して集団生活に慣れている4、5歳児は教師を介さずに友達とのやり取りを楽しむ姿が見られるのではないかと考えられ、その姿を学生が捉えたのであろう。

③自分自身に関すること

自分自身に関する気づきは小項目3つに分けた(表3)。記述数としては多くはなかったが、「現状の自分では現場で何もできない」「もっと学習することが必要だ」というような保育者として現状では力不足であるという気づき、「子どもとうまく関われなかった」「興味を引くことができなかった」という、力不足の中でも特に子どもとのかかわりに特化した気づき、「実習の取り組みに対する意識が低かった」という反省であった。

表3 観察参加実習の気づき・学び(自分自身に関すること)

	実習配属クラス		
	3歳児	4歳児	5歳児
全体的に力不足	2	2	3
子どもとのかかわり方がわからない			3
実習への取り組み(意識不足)		1	
	2	3	6

実際に子ども集団の中に入り、現場の先生の指導を見たり、あるいは同じ立場である他の実習生の動きや子どもとのかかわり方を見

たりするからこそ、自分自身の現状に気づくことができるのではないか。記述数こそ少なかったものの、その気づきから次の手立てをどう立てていこうとするのか、指導教員としては共に考えていくべき視点であると考え。

以上の3つの視点から検討した結果、明らかになった実習教育の課題は、同一施設で実習を行っていても配属されるクラスの子どもの年齢によって、学生の気づきには偏りが生じるということである。年齢に応じて子どもの実態は異なり、保育者に求められる役割も異なる。この点に関しては、3、4、5歳児それぞれのクラスで実習することが良いのか、それとも同じクラスで落ち着いて実習することが良いのかといったメリットデメリットを考慮しながら、よりよい実習の在り方を検討する必要があるだろう。

気づきに違いがあるからこそ、実習後の振り返り(事後指導)の時間が重要であり、それぞれの異なる経験と気づきや学びを共有することが重要であると考え。

4. 「頑張ったこと、うまくできたこと」について

学生が「頑張ったこと、うまくできたこと」と感じていることを表4に示す。同表を附属幼稚園教諭(経験年数26年)に提示し、実習生の様子とのずれ等についてインタビューを行った。その結果を、表4の①から⑥の項目ごとに下記に示す。

幼稚園における観察・参加実習の学びと気づきについて

表4 実習で頑張ったこと、うまくできたこと

- ①観察・参加実習の目的
- ・自己紹介を工夫する
  - ・先生の動きや子どもたちの様子、環境設定をよく観察する
  - ・先生の動きをまねる
  - ・体を大いに使って子どもたちと遊びを楽しむ
  - ・子どもたちに遊びを提案する
  - ・清掃や製作・行事の準備等の業務の実際を学ぶ
- ②実習の基本的姿勢
- ・笑顔を忘れない
  - ・名前をなるべく早く覚えて名前で呼ぶ
  - ・丁寧な言葉遣いをするよう気をつける
  - ・子どもと同じ目の高さで関わる（立て膝姿勢をとるようにする）
  - ・子どもたちが遊具で遊んでいる際の安全確保に気をつける
  - ・子どもたちのお手本になれるようにする
- ③全体への配慮
- ・寄ってくる子どもとだけではなくクラス全員の子ともたちと関わる
  - ・他クラスの子ともたちとも関わる
  - ・同性だけでなく異性の子ともとも関わる
- ④積極性
- ・わからないことを積極的に質問する
  - ・進んで子どもたちと関わる
  - ・子ども一人ひとりの話をよく聞く
  - ・自ら何をしたら良いか考え行動する
  - ・進んで挨拶する
- ⑤保育技術
- ・絵本の読み聞かせ（持ち方・タイミング・声の大きさ・速さ・間を取る）
  - ・導入としての手袋シアター、ペープサート
  - ・手遊び（視線を配る・声の大きさ）
  - ・ボール遊び
  - ・あやとり
- ⑥子どもへの個別支援
- ・身支度（ボタンをはめる等）：自分でやる気になる
  - ・巧技台、登り棒、一輪車、コマ：自分の力でできたように感じる
  - ・砂遊び：泥での飲み物作りの提案等、遊びを広げる
  - ・製作：なるべく自分で考え工夫する、集中できる
  - ・片付け：やる気になる（「かっこいいね」「すごい」）
  - ・給食：完食する、嫌いな物も好きな物と一緒に食べる等の工夫をし食べる
  - ・注意する：いけないことをしているときははっきり言う
  - ・ケンカの仲裁：お互いの話をよく聞く
  - ・ぐずる・泣く：抱きしめて気持ちを受け止める
  - \*できなかった子ができたらオーバーに褒めると次もできると先生にアドバイス頂き実践したら成功
  - \*子どもに頼まれたことを全てはやらず、部分的に自分でするようにしたらできた
  - \*控えめな子には「一緒にする？」と言葉かけする等、個性に合った言葉かけを心がけた

①「観察・参加実習の目的」について

清掃や製作準備等は、教員が行う基本的な作業であるが、核となる学生の有無からか、学生たちの雰囲気や作業への取り組みへの意欲等が期によってかなり違う。

②「実習の基本的姿勢」について

初日から笑顔はなかなか出ない。特に、給食の時間は集中が途切れるのか真顔になっていることが多い。しかし、徐々に自分が笑顔でいることの子どもたちへの影響の大きさに気づき、常に笑顔でいることを心がけられるようになってくる。

③「全体への配慮」について

第一印象が大人しいためか、子どもたちがあまり寄っていかない学生もおり、自分からクラス全員の子どもたちに関わっていくのは大変そうな学生もいる。しかし、子どもたちは大変素直で、そのような学生が上手に読み聞かせをすると一気に評価が変わり、もっと読んでほしいと盛んに言うこともある。保育者が褒めるより、子どもたちの反応が学生たちにとっては一番の手応えとなる。

④「積極性」について

積極的に質問してくる学生が多いが、「叱り方はどうすればいいですか」「言うことを聞いてくれない子にはどのように対応すればいいですか」等、否定的な行動についての対応を聞く学生が多い。子どもたちの良い面を見つけ伸ばすという観点を持ってほしい。

⑤「保育技術」について

手遊びや絵本の読み聞かせについて実践する場は確保しており、堂々とできている学生が多い。手遊びはクラスに配属されている学

生全員で行うことが多いが、お互いに遠慮してしまいがちであり、一人ずつ行った方がうまくいくように思う。勧めても、ピアノ伴奏を積極的に行おうとする学生はほとんどいない。

#### ⑥「子どもへの個別支援」について

個別支援には、保育者と子どもたちとの信頼関係の有無が物を言う。1週間という実習期間では、信頼関係の構築までは難しい。そこで、一人の学生に5人くらいの子どもたちを担当させ、指示だけを繰り返すのではなく個性に合った意欲を引き出すような言葉かけができるよう工夫することを実践させている。

①から⑥の各項目について、7期計7週間にわたり実習を受け入れて頂いた側ならではの確なご指摘をいただいた。教育実習Ⅰにおける観察・参加実習の事前指導の際に参考とし、具体的に指導していきたい。

特に留意すべきは、園側より指摘された、学生たちの雰囲気や作業への取り組みへの意欲等が、核となる学生の有無からか期によってかなり違うという点についてである。この観察・参加実習は、保育者を目指す学生たちにとっての初めての实習となる。子どもたちにとっての一番の人的環境であり責任も重大であるが、それだけにやりがいのある保育者という仕事を志望する気持ちを学生が再確認し、日頃の大学での学びへの動機づけを強めるという、重要な機会となるのである。各期のリーダーは決めているが、学生たちは連絡係という意識が強いかもしれない。事前の説明会時に配属クラス毎に顔合わせを行って配

属クラスごとにリーダーを配置し、声を掛け合いながらまとまりをもって作業に取り組んだり、手遊びや絵本の読み聞かせ等を協力して行ったりする雰囲気の醸成に力を入れていくことも必要である。

また、子どもたちとの信頼関係がものを言う個別支援については、一人の学生に数人の子どもたちを担当させることが提案された。担当の子どもたちを重点的に観察しながら関わることで、良さを認める言葉かけの実践に取り組みやすくなるのではないかという意図からである。学生たちのみならず、子どもたちにとっても有意義な成長の機会となるよう、今後、附属幼稚園と協議を重ねながら、より良い形を作り上げていきたいと考えている。

#### 5. 「今後の課題」について

ここでは、観察・参加実習の後に行った振り返りシートをもとに、学生が今後の課題として取り上げたことをまとめた。課題は、視点別に分類し、項目名をつけた。項目名は、「保育者としての（集団を意識した）関わり」「保育者としての（個を意識した）関わり」「幼児の発達理解」「保育技術」「自分自身に関して」である（表5）。

初めての教育実習となる観察・参加実習では、保育者の仕事の様子や子どもの反応を観察することによる気づきが最も多く、集団としての子どもを保育者としてどのように扱ったらよいのかという視点となる項目、「保育者としての（集団を意識した）関わり」についてが 38.55%、保育者として、子ども個性や個人差を把握し、一人一人にどのように向き



幼稚園における観察・参加実習の学びと気づきについて

合ったらよいのかという視点である項目、「保育者の（個を意識した）関わり」が29.09%であった。

「保育技術」の項目としての絵本の読み聞かせや手遊びなどについては、13.82% と思いのほか少なく感じられた。これは観察・参加実習という初期の実習であればこそ、保育技術として授業等で学び得たものを一緒に楽しんだだけでも、達成感を感じる可能性はあり、今後、本実習を通し子どもの反応を見ながら、様々な気づきを持ち、課題となり得るものである。本調査で大半を占めた保育者としての関わりについての課題でも、今後は、観察による気づきから、実際に個々の子どもに触れ、集団を導く体験や子どもの反応を通し、経験からの気づきに変化をしていくことと推測する。

「幼児の発達理解」の項目については、本実習前に1週間の観察・参加実習を行うことにより、実習で得た経験を持ち帰り、再び授業の中で学びを再構築したり、問題解決を図ったりすることが可能となる。この課題については、子どもの様子を見ながら授業と並行して行うことに効果が感じられる。

最後に、「自分自身について」の項目である。ここには、学生自身の実習に臨む姿勢が課題となっている。体力づくりや、健康管理、積極性、相手の立場に立つなどが挙げられている。これに関しては、学生のソーシャルスキルと関連するもので、実習に臨む上で要する人間性の土台となり得る部分である。挨拶、コミュニケーション、学ぶ姿勢、探求心など、観察・参加実習に行く前にインターンシップ

表5 課題の分類 150名（複数回答あり）

課題の分類		件数	%
<b>保育者としての（集団を意識した）関わり</b>			
広い視野で全体を把握する	39	14.2	
子どもに分かりやすい言葉で話す	21	7.64	
素早く冷静な判断力	5	1.82	
意欲的になる言葉掛け	5	1.82	
準備の重要性、教材をたくさん用意する	4	1.45	
導入を考える	4	1.45	
褒めることや注意をすることにめりほりをつける	4	1.45	
食事の援助	4	1.45	
先を見越えた行動をする	4	1.45	
遊びなど興味をひくものをもっと増やす	3	1.09	
遊びなど子どもが興味をもてるものをもっと増やす	3	1.09	
安全第一に考える	2	0.73	
集団について学ぶ	2	0.73	
計画、時間配分	2	0.73	
子どもをまとめる	1	0.36	
感性豊かに子どもと向き合う	1	0.36	
発達を妨げをしない	1	0.36	
叱るより、楽しく遊ぶ経験をする	1	0.36	
計	106	38.6	
<b>保育者としての（個を意識した）関わり</b>			
子どもが喧嘩した時の対応（止めるべきか、自分で結論を出すのを見守るか）を含む	26	9.45	
子どもの気持ちを受け止め共感、代弁する	21	7.64	
子どもの行動を理解した上での言葉掛け	7	2.55	
子どもの一人一人の個性に合った接し方、言葉掛け	4	1.45	
注意や叱り方、納得のさせ方	4	1.45	
手伝いの加減	3	1.09	
個人差の把握	3	1.09	
個の発達に応じた対応	2	0.73	
子どもとの距離	2	0.73	
怪我の対応	1	0.36	
泣いている子をしっかりと対応して泣き止ますこと	1	0.36	
給食の時に一人ひとりに合った援助	1	0.36	
ぐずる子、わがままな子への対応	1	0.36	
幼児の疑問に答えられるようにする	1	0.36	
トラブルの対応の仕方	1	0.36	
笑顔で人見知りの子とも打ち解ける	1	0.36	
援助の仕方	1	0.36	
計	80	29.1	
<b>保育の技術</b>			
手遊び	15	5.45	
子どもの遊びを知る	14	5.09	
絵本の読み聞かせ	8	2.91	
製作遊び	1	0.36	
計	38	13.8	
<b>自分自身に関して</b>			
体力づくりと体調管理	12	4.36	
積極的に子どもに関わる	5	1.82	
一人の子だけでなく、たくさんの子と関わる	5	1.82	
子どもについての保育者としての知識を増やす	3	1.09	
できることは自分で積極的にする	2	0.73	
恥ずかしさをなくし、人前で話す	2	0.73	
食の知識を増やす	1	0.36	
早く食べる	1	0.36	
子ども、保育者、保護者のそれぞれの立場で物事を考える	1	0.36	
柔軟な考えを持つ	1	0.36	
一つ一つの経験したい	1	0.36	
何もなくても遊びが上手になりたい	1	0.36	
子どものお手本であることを忘れず取り組み	1	0.36	
自分らしい保育の仕方を見つける	1	0.36	
虫などの知識を増やす	1	0.36	
計	38	13.8	
<b>幼児の発達理解</b>			
年齢に対応した成長、心の発達を学ぶ	12	4.36	
発達の個人差を知る	1	0.36	
計	13	4.73	
回答数合計	275		

など多くの経験の場を通し、学ぶことでより充実した実習に繋がるのではないと思われる。

## 6. まとめ

### (1) 今年度実習の成果と今後の実習指導の改善点

はじめに述べたとおり、今年度は本学の教育実習（幼稚園）に大きな変更があった。6月2グループ、7月2グループ、9月2グループ、12月1グループの計7回にわけて、本学の附属幼稚園で観察参加実習を行ったことである。附属幼稚園は本学から電車と徒歩で1時間程度のところに位置しており、普段から慣れ親しんだ環境というわけではない。しかし、本学教員が園長を務めており、附属幼稚園で働く保育者の多くは本学の卒業生である。また、園内研修やPTA学級等には本学教員が多く関わっており、教員間の連携は多少取れているという状況であった。

今回実習をお願いするにあたり、改めて特に実習担当教員と附属幼稚園との連携が必要に迫られるものとなった。保育者養成という視点から、それぞれの立場で同じ学生を見て、それを伝えあったならば、より立体的で多様な学生の姿が見えるようになるだろう。今回は初年度であり、お互いが手探りの状態でもあったため、十分な伝え合いができていたとは言いがたい。

また、実習の時期に関しては再度検討が必要である。特に入学後間もない時期で実習を迎える学生に対する事前指導、行事（運動会や発表会など）への取り組みが多くなる時期

に実習となる学生に対する「遊びから学ぶ」という幼児教育の基本的なあり方についての学びなどを補っていく必要があるだろう。

今回は十分な実習事前指導ができないため、記録用紙の様式を一新し、観察するポイントを意識しながら実習に臨める援助をした（図1～図6,既出）。提出された記録用紙を見る限り、これまでの学生と比べてもそんな色のない記述が随所に見られた。これは、本学教員でもある園長による講話、学年や各クラスで実施された日々の振り返りの時間の中での指導などが学生の記録にあらわされたからであろう。実習の時期によって子どもの姿は変わり、それに伴い保育者の援助の在り方も変わるものであるが、幼稚園の担任の先生方が学生に指導する内容には時期を超えて一貫したものも多くあり、どのグループにも共通した学びや気づき、感想や考察も見られた。

同一施設で別の時期に観察・参加実習が実施されたため、事後指導では時期別に学生の実習の気づき・学びを発表しあった。このことにより、時期により変わるもの・ことがある一方、変わらないもの・ことがあるということを学生は知ることができた。同一施設での実習ならではの気づきであったと言えるだろう。

### (2) 学びの順序性と履修カルテの活用

本学の实習指導の特徴としては、実習を2期に分けて行うことから、「教育実習Ⅰ」、「教育実習Ⅱ」がそれぞれの実習に並行する形で展開できることに加え、本学が独自に行っている高大接続の学びである「2.5教育」を通し、入学前から、保育技術や保育の現場について

知ることができることが挙げられる。2.5教育は、2016年度入学生から取り入れられている。

受け入れ側の保育者のインタビューや学生が「課題」とした内容をもとに、今後の実習指導の内容の順序性について考えると、まず健康管理や積極性、ソーシャルスキルやコミュニケーション、保育の準備や掃除等「自分自身について」で挙げられたことについて実習指導初期に取り入れることである。「保育技術」として挙げた絵本の読み聞かせや、手遊びについては、入学直後の学外オリエンテーション等を通じ、比較的早期より学ぶ機会があるが、2.5教育に取り入れるなどの検討が進行中である。履修カルテを使うなどして、観察・参加実習前に学んでおくべきことを細分化し、学びの過程をより丁寧に見て管理することで実習の一層の効果が期待できる。

観察・参加実習を終え、「保育者の（集団を意識した）関わり」「保育者の（個を意識した）関わり」についての課題や疑問を明確にし、関連授業で解決を図るとともに、2年次に実施される本実習においては、保育者の観察からの考察に留まらず、より能動的に子どもとの関わり、自身の体験から気づきや学びを得、考察ができるよう実習指導の中に盛り込んでいきたい。

### 〈参考文献〉

・松本峰雄監修 浅川繭子、鍛治礼子、才郷眞弓、田中幸、堀科「流れがわかる幼稚園・保育所実習～発達年齢、季節や場所に合った指導案を考えよう～」萌文書林 2015